

令和 3 年度 東京都立戸山高等学校学校経営報告

校 長 決 定

1 今年度の取組状況と取組目標に対する自己評価

自己評価の基準：【A】十分達成できた 【B】概ね達成できた 【C】あまり達成できなかった

(1) 学校経営・組織マネジメント

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 学校組織マネジメントを意識した学校経営 【A】	① 校務分掌を中心とした様々な業務のシンプル化、「見える化」を図り、全教職員が内容を把握できるようにする。 ② マンパワーに頼ることなく、組織（チーム）として課題解決に向けた仕事ができるような計画的な人財育成と人財配置（人事異動）を実施する（属人的な仕事から、チームとしての組織的な分掌業務への移管）。 ③ データ・ファクト・ロジックに基づいた学校経営・校務分掌の推進 ④ 効率的な予算編成並びに執行（選択と集中） ⑤ 教職員の勤務時間の負担軽減を考慮した働き方改革の実現	① 「見える化」を図るために、管理職からの資料はA 3 判 1 枚に収まる内容のものを提示した。 ② 適切な異動のために、6 年間の在籍期間が過ぎた教員については速やかに異動対象とした。そのために、1 つの分掌には長期に属さないように校内の分掌配置を行い、B 選考管理職を 2 名輩出できた。 ③ 年度初めに「学校評価計画表」を作成し、企画調整会議並びに学校運営連絡協議会において提示した。 ④ 中・長期的な視野に立った予算編成を行い、校長による査定ヒアリングを実施し、これまで更新できなかった備品類を買い揃え、教職員の負担軽減につながるように TAIMS パソコン更新に合わせてモニター並びにワイヤレスキーボードを補正予算にて購入できた。 ⑤ 毎月一人一人に前月分の勤務状況表を配布し、残業時間等を把握できるようにし、80 時間を超えた職員については、産業医との面談を実施した。

イ 新型コロナウィルス感染拡大防止等に対応した安心・安全な学習環境づくり 【A】	① 新型コロナウィルス感染拡大防止等に対応した弾力的な教育課程の編成 ② パラダイムシフト（枠組みの転換）における授業のあり方の検討・オンライン学習等、ICTを活用した学習環境の確保 ③ 生徒の健康面を意識した学校行事の再編成（延期もしくは中止） ④ デジタルデバイドを意識した情報発信（あらゆるメディアを活用した情報発信）	① 緊急事態宣言及びまん延防止等重点措置の状況を見ながら、学校行事の見直し等を行った。 ② すべての教科において、ICT活用により、オンラインの授業を実践できた。 ③ 感染状況を見ながら部活動の中止等の判断や運動会、戸山祭は形を変えての実施を行った。 ④ 生徒・保護者への連絡は、ホームページやTeamsを活用した。
ウ カリキュラム・マネジメントを意識した教育課程の編成 【A】	① RPDCAを意識した教育課程の編成 ② 教科横断型の教育課程の編成 ③ グランドデザインに基づく、全教科・全単元のルーブリックの作成と教科毎に評価規準を統一した観点別評価の試行	① 「学校評価計画表」により、1年間の教育課程を編成した。 ② 総合的な探究の時間である学校設定科目「知の探究Ⅰ、Ⅱ」を全校体制で実施した。 ③ 新学習指導要領に基づいた観点別評価について2学期に試行し、中学校の教務主任を講師とした校内研修会を実施した。
エ Tokyo スマート・スクール・プロジェクトの実現 【B】	① Wi-Fi 環境の整備により、ICTを最大限に活用し、費用対効果、時間対効果を考えた教育活動を行うために、Microsoft Office365 を活用した、学校評価やアンケート集計等の実施や部活動指導員のアウトソースを活用する。 ② 職員会議等の会議におけるペーパーレス化と完全な電子起案化の推進 ③ 働き方改革により夏休完全消化、有給休暇15日以上を取得する。	① 様々な場面でTeamsを活用し、学校評価だけでなく、アンケート集計においてはFormsを利用する等、ICTを積極的に活用した。また、リクルート社のスタディサプリを導入し、補習等のアウトソースとして動画視聴を促した。 ② 会議のペーパーレス化まではできなかったが、電子起案率は100%達成できた。 ③ 夏季休暇については、ほぼ全教職員が5日を消化できたが、有給休暇15日以上の取得は全員達成まではいかなかった。
オ 特色化を意識した教育課程の編成 【A】	① 進学指導重点校としてのトップランナーを目指す新教育課程の編成 ② SSH及びTMのシンプルかつ分かりやすい事業構築（「見える化」） ③ 総合的な探究の時間（人間と社会）	① 新学習指導要領に基づいた新教育課程を編成できた。 ② 全教職員に事業がわかるように、職員会議、企画調整会議において様々な事業について説明を行った。

	における体験活動の再構築（清掃活動等の奉仕的内容の取りやめ） ④ SSHとTMと連動したSTEAM教育の検討並びにSDGsを意識した教育活動の実施 ⑤ 主体的・対話的・深い学びの実現による教科横断型「知の探究Ⅱ」（総合的な探究の時間）を中心とした全校体制による探究活動の充実	③ 「人間と社会」は、奉仕的な体験活動をやめ、防災体験やTGG体験等、変更実施した。 ④ 日常の教育課程において、STEAM教育の実践ができるようなカリキュラム編成を行い、「知の探究Ⅱ」においてSDGsをテーマとした探究活動を実施した。 ⑤ 全校体制による「知の探究Ⅱ」を実施し、担当者によるリフレクションを定期的に行った。
--	--	---

（２）学習活動

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 「東京型教育モデルの実現」 【A】	① 暗記中心、チョーク&トークのパッシブな授業形態や過去の成功体験から脱却した主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の実践 ② Teams や Forms 等の Office365 を活用した授業実践、及び模試のビックデータを活用した個に応じた学習指導の実施	① コロナ感染予防の観点から、話し合い活動を中心としたアクティブ・ラーニングの実践は一部を除き積極的には至らなかった。 ② Office365 は、すべての学年、教員において活用できた。国公立大学二次支援対策として、模試のデータ等を活用し、個別指導を実施した。
イ 新学習指導要領に対応した授業展開 【B】	① 同一科目担当者毎の評価規準を改め、全定期考査の共通問題化により観点別評価を含めた学習評価の評価規準を統一 ② 新たな科目に対応した教材研究の開始 ③ 大学入学共通テストに対応した学校設定教科・科目の設定	① 定期考査の共通問題化について、一部の教科を除き実施し、観点別評価についても評価規準の統一を図ることができた。 ② 新学習指導要領に基づいた新たな、歴史総合については、担当者間による教材研究が進んだ。 ③ 演習科目を中心とした共通テスト対策の科目を設定した。
ウ 進学指導重点校としての学力向上に向けた組織的、継続的な取組み 【A】	① 習熟度授業及び少人数授業、夏期講習等により個々の生徒の学力、進路希望先に合わせた学習指導の推進 ② 成績上位層に向けた授業実践と「下げない志望」に対する個別指導の充実 ③ 入学時からの学力の定点観測と「学	① 英語、数学において習熟度並びに少人数授業を展開し、生徒の学力、希望進路に合わせた夏期講習、3学期の特別授業を実施した。 ② 3学年の担任や授業担当者の取組により、東大現役合格10名、難関国公立大学31名の合格者を輩

	力進路データベース」の整備により個々の生徒の状況を全教員で共有し、学力の向上と進路希望の実現 ④ 授業のプロとしての50分の授業における寝かさない授業、他教科学習をさせない授業の実践 ⑤ 相互授業参観期間を活用した指導教諭並びに進学指導研究生を中心とした全教科による授業研究の実施	出できた。 ③ 進学指導対策会議を年間15回開催し、模試の分析等を教職員間で共有できた。 ④ 授業観察により、寝かさない授業や他教科学習をさせない授業の取組を行った。 ⑤ 進学指導研究生2名の授業研究の機会を中心に、相互授業参観等により、授業研究を実施した。
エ AI時代に対応した学力の育成 【B】	① リーディングスキルテストの結果に基づき、すべての教科において、読解力を育成するための授業内容の再構築 ② 読書活動を通じた思考力・判断力・表現力・創造力の育成 ③ GIGAスクール構想スクールを意識したBYODを中心としたタブレット端末等の活用やTeams等を活用した授業展開の実施	① 1学年の4月にリーディングスキルテストを実施。その結果を校内研修の形で全教職員で情報を共有。各教科により、スキル向上のための対策を行った。 ② 図書館司書の取組により、新刊本の紹介等、読書活動を推進した。 ③ 全教職員の取組で、TeamsやFormsを活用した授業実践を行った。
オ 英語教育推進校として4技能をバランスよく育成し、将来国際社会に貢献できる人材の育成 【A】	① オンライン英会話やJETの活用等により、特に「聞く」「話す」力の育成 ② 4技能を測定する外部検定試験（GTEC等）を1学年、2学年全員に受験させ、総合的な英語力を育成 ③ JETを活用し、現代英語として適切な表現ができる力の育成とともに、理数論文等でも的確な表現ができる力の育成 ④ TGG（Tokyo Global Gateway）を活用したアウトプット場面の設定	① 1学年を中心にオンライン英会話を実施。 ② GTECを1学年、2学年にそれぞれ1回ずつ受験させ、4技能の測定を実施し、授業改善に結びつけた。 ③ SS英語を中心にJETによる授業を行い、表現力の育成に力を入れた。 ④ 初めて1年時にアウトプットの機会として3月にTGGを利用した。
カ SSH第IV期指定校としてのSSH事業の一層の充実 【C】	① SSHクラス以外の生徒が学校設定科目「知の探究Ⅱ」の履修に向け、1学年で行う「知の探究Ⅰ」の充実 ② 科学の甲子園等のコンテストでの上位入賞、生徒の英語での研究発表回数の増加 ③ 生徒研究成果合同発表会と理系女	① 「知の探究Ⅱ」の事前学習として、Ⅰの授業において、研究テーマの設定の仕方等を学ばせた。 ② コロナ禍で、対面によるコンテスト参加は進まなかったが、科学の甲子園では、1名が神戸での大会で発表を行った。

	子交流会（マリーハウス）の開催 ④ テレビ会議システム等を有効に活用しながら、海外を含む研究機関や大学等との共同研究や直接交流、他のSSH校との連携強化促進 ⑤ 全生徒を対象にSSH講演会や教科融合（連携）型の講義、ワークショップの実施により、理数リテラシーの育成並びにプレゼンテーション能力の育成	③ 3月にSSと「知の探究Ⅱ」の生徒研究成果合同発表会を実施。しかし、マリーハウスの実施はできなかった。 ④ コロナ禍により、海外との交流は実施できなかった。 ⑤ SSH講演会やリレー授業等は計画的に実施できた。
--	--	---

（３）進路指導

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 進学指導重点校としての1学年からの系統的、組織的な進路指導 【A】	① 学習ガイダンス等の丁寧な実施により、入学時の高い進学目標を維持させ、目標達成に向けた努力を促す。 ② ビックデータを活用した進学対策会議を中心に志望校検討会議も活用しながら進路部を中心に学年と教科が個々の生徒の情報を共有することで、組織的な学力向上と希望進路の実現を図る。	① 現役合格者による卒業生講話や進路ガイダンスを通じて、目標達成に向けたモチベーションの涵養をすることができた。 ② 進路部やTM部を中心に、3学年と連携しながら月1回の進学対策会議をとおして、模試結果の情報を共有しながら、各教科の指導へとフィードバックできた。
イ 長期休業期間中の講習参加生徒の増加 【A】	① 各教科で講習内容を検討し、全員体制で効果的な講習を実施する。 ② 長期休業日中は、部活動、学校行事の準備より講習を優先するように生徒指導を行い、講習参加者の増加を目指す。 ③ 早い時期に長期休業日中の講習の講座数・日程等を生徒に周知し、生徒に長期休業日中の学習計画の作成を促す。	①② 各教科によっては、定期的な朝学習の実施、長期休業中は、オンラインでの講習を含めて、全教職員で対応した。 ③ 各教科によって日程・教室の調整を行い、長期休業中における講習の充実を図ることができた。
ウ TMの取組みにより、医学部医学科進路希望者への進路実現 【C】	① クラウド等を活用して、個々の生徒の学習状況と学習成果を迅速かつ的確に把握した指導を実施する。 ② 在京の医科大学や医学系研究機関、病院等と連携し、オンラインを含めた生徒向けの講演会、見学会、体験実習等を実施し、課題研究と研究発	① Teams等を活用し、学習状況調査の結果を把握し、個人面接等に生かすことができた。 ② 新型コロナウイルス感染症対応により、都立病院や医科大学等による実習は実施できなかったが、オリンパス株式会社との連携によ

	表会を実施する。 ③ 1 学年から十分な自主学習時間を確保させ、文系科目も含めて基礎基本を取りこぼすことなく学習させる。 ④ TMに参加していない生徒も含め、医学部医学科に対する進路情報を提供し、自分に合った大学を受験できるように支援する。	り、内視鏡体験授業が実施できた。 ③ 模擬試験の受験だけでなく、学習時間の管理も適宜行った。 ④ TMplus として、TMに参加していない医学部進学希望者に対しても情報提供を行ったが、国公立大医学部医学科の現役合格者数は2名にとどまった。
エ キャリア教育の重視 【A】	① 学校外の機関や卒業生等からの支援等、外部人材を活用し、進学校としてのキャリア教育の充実を図る。 ② 進学指導重点校としてのミッションだけではなく、社会との接続（トランジション）を意識した見えない学力や見えにくい学力（コンピテンシー）の育成を図る。	① ロールモデルとして卒業生の合格体験講演会や卒業した社会人からの講話により、将来へのモチベーションを涵養できた。 ② 知識・理解だけの注入だけでなく、学校行事や部活動を通じて、「学力の氷山モデル」にみられるような、コミュニケーション能力や、コンピテンシーの育成を図った。

（４）生活指導

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア SNSの適切な利用促進に関する指導の徹底 【A】	① 望ましい生活習慣を確立する指導の一環として、生徒が意図せずにトラブルや犯罪に巻き込まれたり、他者を傷つけたりすることのないよう、全教職員があらゆる機会をとらえて「SNS戸山ルール」の徹底を図る。	① セーフティ教室や様々な場面を通じて、SNSの正しい使い方や「SNS戸山ルール」の徹底を図った。
イ 体罰根絶といじめの事前防止・早期発見・早期対応の徹底 【A】	① いじめ・体罰に関するアンケートを年3回実施するとともに、特に部活動において顧問教諭と外部指導員とが連携して体罰を根絶する体制を構築する。 ② アンケートの結果により、いじめが発覚した場合には、いじめ防止対策委員会を速やかに開催し、初動対応によって重大事案にならないようにスクールカウンセラーを含めた全教職員で組織的な対応を実施する。	① いじめ・体罰に関するアンケートを年3回実施し、記述内容によっては生徒からの聴き取りを実施。課題として残るものは見受けられなかった。 ② スクールカウンセラーとの綿密な打ち合わせ等により、生徒情報を共有し、定期的な教育相談委員会を開催し、重大事案にならないような組織を確立できた。

ウ 戸山ならではの生活指導の充実 【A】	① 「自主自立」という名の丸投げや放任ではなく、見守る体制を取りながら、学校生活の充実に向け、生徒自らルール作り等ができるように導いていく。	① 生徒部を中心に見守ることをスタンスに生徒指導を行えた。
-------------------------	--	-------------------------------

(5) 特別活動・部活動

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア ホームルーム活動・生徒会活動・学校行事を通した生徒の主体性の育成 【A】	① 本校の伝統である「自主自立」の精神を踏まえ、生徒が自ら課題を見つけ、自ら収集した情報をもとに自ら解決策を考え、自らの意志決定により、問題をよりよく解決していけるよう支援する。 ② 学校行事において、見通しをもって計画的に準備させることにより、質の確保と行事終了後は速やかに学習中心の生活に復帰できるよう指導し、授業や学業との両立を図る。 ③ 特別活動終了後は、必ずリフレクション（振り返り）を行うとともに、Forms等の活用によりアンケートを実施し速やかに次年度に向けた反省点を見出していく。 ④ 経営企画室と連携し、会計担当生徒を指導し適切な会計処理を実施する。	①② 指示・指導ではなく見守ることを中心に、学校行事等の企画や運営等支援を行うことで、コロナ禍における運動会や戸山祭、生徒会主催の学校説明会等を実施した。 ③ TeamsやForms等を活用したリフレクションを必ず行い、次年度に向けた課題を見出すことができた。 ④ 経営企画室と連携を図り、適切な会計管理・処理を実施した。
イ 部活動を通した健全育成 【A】	① 「部活動に関する活動方針」や文化部・運動部活動ガイドラインに基づき、全部活動が週二日以上完全休養日を設定するとともに、短時間で最大限の効果を上げる合理的な活動内容や活動方法等を工夫することで、自主学習の時間を確保する。 ② 勝利至上主義に陥ることなく、生徒の自主性を尊重した部活動の在り方を意識した指導を実施する。 ③ 部活動ごとに口座を開設し、部費を一元管理するとともに、通帳や会計報告等を定期的に管理職が確認す	① 緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の期間中は、感染予防として部活動については制限をし、クラスターを発生することなく、活動することができた。 ② 部活動の在り方については、クラブ管理局を中心に生徒自らその在り方を検討した。 ③ 部費や部活動に係る予算執行については、生徒任せにすることなく、顧問が適切に関わりながら管理し、通帳及び印鑑は管理職の適切な管理下により執行できた。

	ることで、適正な部費の執行・管理を行う。 ④ 教職員の加重負担とならぬように、部活動支援員の活用と部活動の今後のあり方を働き方改革の面から検討する。	④ 働き方改革を進めるため、部活動支援員の活動時間を増加し、教職員の負担を軽減することができた。
ウ 「アクティブプラン to 2020」を踏まえた体力向上 【B】	① 体育の授業や体育的行事、部活動の充実により体力テストの結果を向上させる。 ② オリンピック・パラリンピックを契機とした生涯スポーツに親しむ姿勢を育成する。	① 昨年度に引き続き、体力向上に向けた取組みを実施した。 ② 新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、体育の授業も種目等に制約を受けたが、体力向上だけでなく、スポーツに親しむ姿勢を育成した。

(6) 安心・安全な環境作り

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 心身の健康と安全に対する意識を高めた健全育成 【A】	① 地域と連携した総合防災訓練を行うことで、自助・共助の精神を培う。 ② 自転車使用に関する安全教育指導を行い、自転車通学者の保険の全員加入やヘルメット着用の指導を実施する。 ③ 発達障害等、特別な支援が必要な生徒に対して、合理的配慮に基づく適切な対応を実施するとともに、障害者への理解推進を図る。 ④ スクールカウンセラーや養護教諭と連携を図り、定期的な教育相談委員会を実施することで、生徒のメンタル面でのサポートを行う。	① 新宿区や地元町内会、消防署等との連携により、1 学年を中心とした総合防災訓練を実施した。 ② 自転車使用に関しては、YouTube 動画等を活用し、指導を行った。 ③④ スクールカウンセラーと定期的な情報交換を行い、課題のある生徒の対応については、教育相談委員会等を通じて全教職員で共有化を図った。
イ 危機管理の徹底 【A】	① 新型コロナウイルスの感染拡大防止に最大限配慮し、校内においては 3 密（密閉、密集、密接）の場面を避けた教育活動を実施する。 ② アレルギーや疾病のある生徒に関する情報を校内で共有し、危機管理に努める。 ③ 生徒のメンタル面における小さなサインを見逃さず、迅速かつ組織的	① 授業等においては常に 3 密を避けるような取組の実施、昼食時は、黙食の徹底を図るよう指導した。 ② 年度当初にアレルギー疾患のある生徒の情報を共有し、全教職員に対して、エピペン研修を実施した。 ③ スクールカウンセラーによる研修において、対応の仕方等についての情報の共有を図った。

	な対応を行うとともに、SOSの出し方に関する教育を推進する。 ④ 学校事故の未然防止（リスク・マネジメント）と事故初動対応の重要性を理解し、授業や部活動等の体育活動中の事故を未然に防止するとともに、万が一事故が発生した際には、速やかな報告・連絡・相談体制により、被害を最小限にとどめる。 ⑤ 児童相談所や警察等と連携し、家庭内での虐待が予想される生徒の安全を確保する。	④ 職員会議や服務事故防止研修等を通じて、リスク管理や発生した際のリカバリーについての情報の共有化だけでなく、組織としての対応の仕方、報告・連絡・相談体制については徹底できた。 ⑤ 関係機関、スクールカウンセラー、養護教諭との連携により、速やかに生徒の安全確保について対応できた。
ウ 新型コロナウイルス感染拡大防止対応 【A】	① 自宅における毎日の検温の徹底と Teams での情報収集、昇降口でのサーモグラフィカメラによる検温の実施 ② マスクの着用の徹底と昼休みの喫食時における注意喚起や手洗いと手指消毒の徹底 ③ 感染拡大防止に向けた部活動や学校行事、広報活動等への臨機応変な対応	① 毎日の健康観察の徹底と Teams を活用した情報収集、サーモグラフィカメラによる検温を毎日実施した。 ② 不織布マスクの着用の徹底、寄り道等をしないよう行動について注意喚起を行った。 ③ 感染予防として、部活動の制限、学校行事等、臨機応変な対応を実施した。
エ 保護者との良好な「顔の見える」関係づくり 【A】	① 保護者が安心して学校教育への参画できるよう、保護者会を中心とした情報の共有化を図る。 ② ホームページを活用した保護者向け情報の発信（パスワードをかけた保護者向け文書の掲載） ③ 大学進学に向けた不安を取り除くために3学年における三者面談の全員実施（1、2学年は任意とするが、企画並びに呼びかけの広報は実施する） ④ 戸山会（保護者会）との連携の充実 ⑤ 学校評価による保護者の意向の把握	① 各学年年間3回、感染状況により、対面とオンラインのハイブリットによる保護者会を実施した。また、運動会、戸山祭等、保護者が生徒の様子を見る機会がなかったので、感染対策を取りながら、保護者向けの授業公開を2学期に実施した。 ② 生徒に配布した文書を中心にパスワードをつけてホームページに掲載した。 ③ 3学年の三者面談を夏季休業期間中に全員実施した。 ④ 保護者会との定期的な情報交換を実施した。 ⑤ 学校評価アンケートの自由意見により、保護者の意向を把握した。

(7) 募集・広報活動

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 組織的な募集活動の充実 【A】	① 本校の特色や強みをデータで提示する等、わかりやすく中学生・保護者へアピールする。 ② 戦略的かつ効果的な募集活動を展開し、学校説明会、学校見学会だけでなく、学習塾の出張説明会等積極的に広報活動を実施する。 ③ 私立高校を意識した学校案内の刷新や「まなびゅー」や YouTube 等の動画の活用等、イメージ戦略を整える。 ④ 総務部だけが行うのではなく、学校説明会や学校見学会の広報活動は全校体制で、学校行事として経営企画室職員を含めた全教職員が必ず関わりをもつ。	① 本校の特色がわかりやすいような資料「この1枚でわかる！戸山高校」をA3判1枚で作成し、説明会等で配布した。 ② コロナ禍で、対面による学習塾の説明会へは参加できなかったが、オンデマンド方式での説明会には積極的に参加した。 ③ 生徒会による学校紹介ビデオを作成し、本校のホームページに掲載をした。 ④ 全校体制で学校説明会等の広報活動を実施した。コロナ禍のため、オンラインによる説明も実施した。
イ ホームページを中心とした広報活動 【A】	① 学校情報を適宜ホームページ掲載等、広報活動を充実させる。 ② カウンター機能を重視し、アクセス件数を把握することで、中学生や保護者の動向を探る。 ③ 在校生やその保護者向けに、適切な内容を随時掲載する。	① ホームページのリニューアルにより、頻繁に内容を更新するようになった。 ② カウンター機能を利用し、アクセス件数やデバインドによる件数を把握した。 ③ 本校の様子を極力掲載できるようにし、年間更新回数は、150回以上、一日平均のアクセス件数は、3,500件を超えた。

(8) 経営企画室体制

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 学校経営への参画 【A】	① 学校経営計画に基づき、学校経営に参画し、工夫を凝らした経営企画室運営を行う。 ② 教員と企画室職員が協働し、積極的な経営参画を図る。 ③ 働き方改革の一環として「費用対効果」と「時間対効果」を意識し、ICTを最大限活用した業務遂行をする。	①② 会計年度任用職員3名を含め、経営企画室全員体制による学校経営への参画により、適切な予算執行ができた。 ③ ICTを最大限活用し、電子起案率100%を達成することができた。 ④ ワンストップサービスとして、経営企画室の窓口業務、電話対応について適切に実行できた。

	④ 学校の総合窓口として思いやりの心と品格を重んじ、全校の機能をスムーズに調整する。 ⑤ 業務全般を理解するとともに、担当部署のスキルアップを図ると同時に課題意識を常にもち、組織的に業務改善を図っていく。 ⑥ 学校行事や保護者会活動等への積極的な参画。	⑤ 業務改善を意識し、全メンバーによる新規採用職員の育成も適切に実行できた。 ⑥ 学校行事等にも、経営参画の一環として、参加出来た。
イ 適切な予算執行 【A】	① 計画的な事務執行により、予算の有効活用と一般需用費におけるセンター執行率の向上を図る。 ② 教員との連携により、中長期的見通しに立った施設・設備・備品等の更新を図る。 ③ S S HやTM等の特別予算の計画的かつ適正な予算執行 ④ 図書館運営や施設管理において委託業者と連携し、適切な運営を図る。	① 新型コロナウイルス感染防止対策による、緊急性のある予算執行もあったが、ほぼ予定通り進めることができた。 ② 中・長期的な視点に立った予算編成指針を策定し、これまでできなかったメールボックスや体育館の演台等の更新を図ることができた。 ③ S S HやTM等の特別予算を活用し、教育活動に必要な消耗品等を購入した。また、自立経営推進予算の補正予算をうまく活用し、TAIMS パソコン更新に合わせ、大型モニター並びにワイヤレスキーボードを購入した。 ④ 委託業者との連携により、適切な運営を行えた。
ウ 関係団体との連携	① 保護者会（戸山会）との積極的な連携を図り、校務運営を支える。 ② 同窓会（城北会）と連携を図り、学校の適切な管理を行う。	①② 戸山会及び城北会との連携により、卒業生講話や校務運営を適切に実行できた。また、城北会の在校生の予納金については、学校徴収金としての委任業務を切り離し、適切な関係へと整理できた。

2 重点目標と数値目標

重点目標	具体的な数値目標（令和2年度達成数値）	達成数値
学力向上（総合偏差値）	定観測の11月のベネッセ模試総合成績における総合偏差値 1年生 74以上 <u>50名</u> （48名） 68以上 <u>160名</u> （152名） 60以上 <u>300名</u> （297名） 2年生 74以上 <u>50名</u> （45名） 68以上 <u>150名</u> （141名） 60以上 <u>280名</u> （270名）	65名 191名 301名 21名 101名 233名
進学指導重点校としての進学実績	① 大学入学共通テスト5教科以上受験者 <u>285名</u> （273名） ② 同上760点（約85%）以上 <u>70名</u> （51名） ③ 東京大学現役合格者 <u>11名</u> （8名） ④ 難関国公立大学（東大・京大・東工大・一橋大・国公立大医学部医学科）現役合格者 <u>45名</u> （33名） ⑤ 国公立大学現役合格者 <u>160名</u> （145名） ⑥ 国公立大学医学部医学科現役合格者 <u>8名</u> （6名） ⑦ 早慶上理現役合格者 <u>185名</u> （173名）	283名 12名 10名 33名 141名 2名 169名
募集対策の充実	① 学校説明会（10、11月）の参加者 <u>2,900名</u> （2,724名） ② 応募倍率（推薦選抜） <u>4.55倍</u> （4.50倍） （学力選抜） <u>2.20倍</u> （2.16倍）	1,883名 4.61倍 2.06倍
SSH第Ⅳ期指定校としてのSSH事業の充実	① 科学の甲子園等のコンテスト、研究発表会入賞者数 <u>40名</u> （38名） ② 生徒の英語での研究発表 <u>100件</u> （96件） ③ 授業公開、地域向け講演会、研究発表会の開催回数 <u>15回</u> （11回） ④ SSHクラス以外の生徒向け理数講演会、教科融合型の講義、ワークショップ等の開催 <u>12回</u> （10回） ⑤ 小・中学生向けの理科実験教室の開催 <u>6回</u> （5回） ⑥ 理科教員向けの理科研修会の開催 <u>5回</u> （3回） ⑦ 本校が主催するSWR（理系女子交流会）発表校数と発表者 <u>10校100名</u> （3校63名） ⑧ 本校で開催するTSS（生徒研究成果合同発表会）の発表校数と参加者数 <u>20校300名</u> （10校209名）	30名 21件 12回 20回 6回 5回 3校17名 10校44名
Tokyo スマートスクールプロジェクト並びに「東京型教育モデル」の実現	① 暗記中心、チョーク&トークのパッシブな授業形態や過去の成功体験からの脱却した主体的・対話的で深い学びの授業実践 全教職員による実施 <u>100%</u> ② 校内Wi-Fiを活用したICTによる全教職員による授業実践 <u>100%</u> ③ 全教職員によるOffice365の活用実践 <u>100%</u>	100% 100% 100%

3 次年度に向けた課題と対応策

進学指導重点校として、東大現役合格10名、難関国公立大学現役合格31名と2001年に進学指導重点校に指定されてからの大きな成果である。本校の特色であるSSH活動は、コロナ感染拡大防止のため、海外研修や連携等はできなかったが、「知の探究Ⅱ」に見られるように、SSHクラス以外の6クラスで探究活動が進み、全校体制が確立した。今年度は、第Ⅳ期3年目の中間報告の年であったが、予定通り進んでいる。今後は、第Ⅳ期終了後、どのような体制を組んで行くのかが大きな課題となる。

もう一つの柱であるTM活動も同様に、コロナ対応のため、これまで実施できていた都立病院での体験活動、大学医学部での研修の受け入れができず、関係者による講演会にとどまった。幸いにして、オリンパス株式会社からの内視鏡研修に参加でき、TMメンバーのモチベーションアップには繋がることのできた。残念ながら74期生の国公立大学医学部医学科現役合格は2名にとどまった。全体的な医学部は私立大学等を含めて合計4名と昨年度よりは少ない結果となった。

次年度からは、新学習指導要領の年次進行とそれに伴う、観点別評価の導入、校務支援システム、定期考査採点システム、庶務事務システムの導入と、様々なシステム変更や導入が行われることとなり、それに対する対応が喫緊の課題となる。特に、SSH活動に伴い、SSクラスは教育課程上、教科「情報」を特例として実施していない。また、SS以外のクラスも、1年次、2年次に教科「情報」は1単位ずつとなっている。大学入学共通テストでの教科「情報」の導入により、どのような問題や対応をする必要があるのか。さらに、数学Cのベクトル問題についても、国公立大学を中心とする受験体制として、どのようなカリキュラムにしていくのかは、早急な問題として検討していかなければならない。